

^{かみやち}神谷地遺跡は、横手市雄物川町薄井にあり、ほ場整備事業に伴う分布調査で平成23年に新たに発見されました。横手市教育委員会が平成24・25年に発掘調査を行い、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、近世の複合遺跡であることが明らかとなりました。



神谷地遺跡の立地と調査風景

神谷地遺跡に初めて人がはいったのは、約7,000年前の縄文時代早期末～前期前葉でした。その後、約5,000年前の中期には集落（ムラ）として、約3,000年前の晩期には墓地として利用されました。弥生時代・古墳時代には小規模な集落が営まれ、古代・近世には集落の外縁部（遺物散布地）だったようです。

今回の企画展では、横手市教育委員会の全面的な協力をいただいて、主に縄文時代中期の集落とそこから出土した遺物にスポットをあてました。中期集落の竪穴住居跡（以下、住居跡）には特徴的な“いろり”（炉）がともないます。70棟を超える住居跡のいろりと土器の形、文様はどのように変化していくのでしょうか。

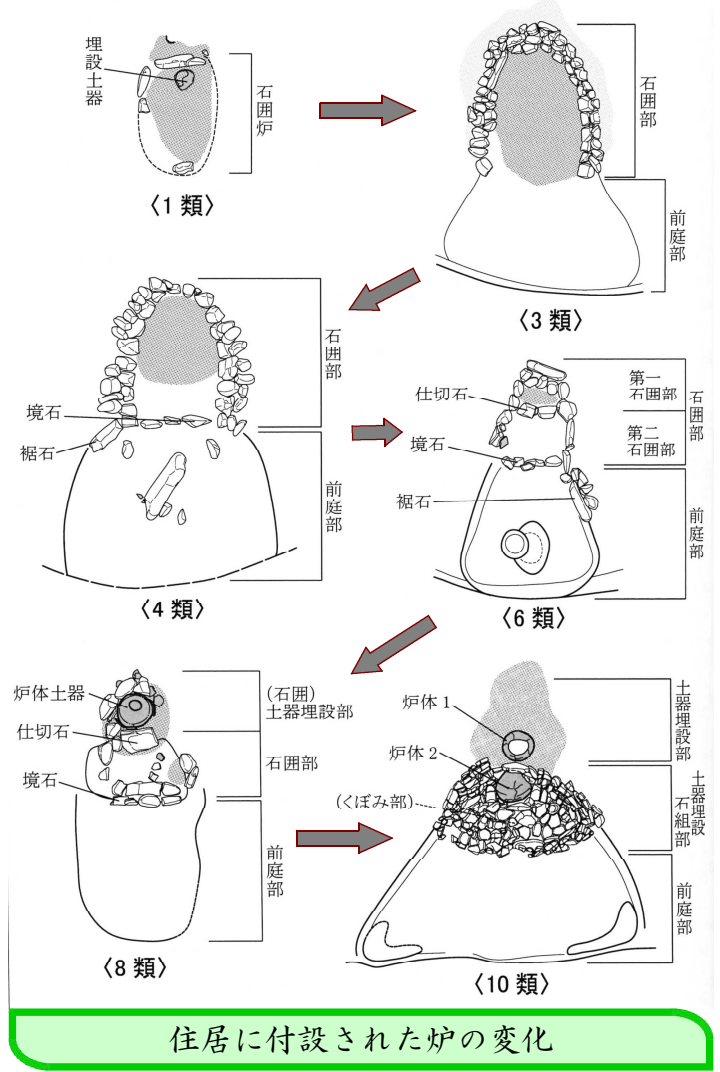


縄文時代中期の土器(7号住居跡)

土器の変化と炉の移り変わり

70棟を超える縄文時代中期の住居は、同時期に造られたわけではありません。およそ500年程の間に、2～3棟ないし5～6棟が組になって移り変わった結果、70棟を超える数になったことが推定されました。それは、住居にともなった土器や住居に設けられた炉の形の変化からわかります。土器には様々な文様・装飾が施されます。それらは数百年の間に一定の変化を見せます。

神谷地遺跡にムラが造られ始めたころには、土器の表面に粘土を貼り付け、立体的な渦巻きなどの装飾が施されました。しかし、ムラがなくなるまでには立体装飾から、表面の縄文を「S」「C」のようなアルファベットに似た形や楕円形など、曲線的に描いた線で区画するように変わってゆきました。70棟余りの住居の土器を分類すると、2～3棟ないし5～6棟の組毎に同じような文様・装飾の土器がありました。神谷地ムラの全体が細かな時期に分かれることがわかったのです。



住居に付設された炉の変化



15・16号住居跡調査風景



注口土器 (15号住居跡)



炉埋設土器(48号住居跡)

神谷地ムラで最も古い段階の住居には、小さな石囲炉が設置されます（4号住居）。石囲炉は次第に大きくなり、石囲部に隣接して掘り込み（前庭部）も付されるようになります（15・25号住居など）。炉は当初、住居の中央にありましたが、前庭部が造られる頃から住居の壁寄りに移動します。この後、炉の中に土器が埋められる（埋設土器、炉体土器）ようになります（35・48号住居など）。そして、炉や土器を囲む「石囲」から、石を敷き詰める「石組」に変化します（54・56号住居など）。土器を埋設した石組炉は60号住居で形状・規模ともピークを迎えます。それ以降、土器埋設は残るものの、石組が不明瞭になっていきます。この段階の直後に、縄文中期の神谷地ムラは途絶えたようです。



4号住居跡 石囲炉



25号住居跡 石囲炉



35号住居跡 埋設土器



54号住居跡 土器埋設石組炉



56号住居跡 土器埋設石組炉



60号住居跡 土器埋設石組炉

アスファルト・漆容器

神谷地遺跡の縄文時代中期の人々は、天然のアスファルトを集落内に持ち込んで石鏃^{せきぞく}を矢柄^{やがしら}に装着する際などに接着剤として使用していました。また、漆も生漆のままか、赤漆にして土器などに塗っていました。遺跡からは、それらアスファルトや漆を入れた容器や使用時にパレットのように利用した土器片も出土しています。

展示のアスファルトは、9号住居跡の石囲炉の側から長さ20cm、幅8cm、厚さ6cmの塊で出土したものです。その出土状態は、炉を囲う石の一部として置かれたかのようなものでした(写真右手前)。漆容器とそのパレットは52号住居跡から出土しています。



9号住居跡 石囲炉



52号住居跡出土の漆容器土器

神谷地遺跡の縄文人は何を食べていたのか？

発掘調査を行っている時に、住居内を埋めた土の中に焼けて白くなった微細な骨片が含まれていることが確認されていました。住居の炉跡毎に土壌を採取し、水で洗って骨片を選り分けました。これを専門機関で分析をしたところ、次のような魚やほ乳類などの骨であることが判明しました。



サケ科の椎骨

ど多数出土

【コイ科】住居跡3棟から出土

【魚種類不明】住居跡1棟から出土

【カエル目】住居跡3棟から上腕骨・尾骨出土

【鳥種類不明】住居跡2棟から指骨出土

【イノシシ】住居跡1棟から出土

【ニホンジカ】住居跡1棟から角破片出土

特にサケ科の骨が住居の炉内・周辺から多く出土したことから、神谷地遺跡の縄文人はおそらくサケを盛んに獲って食べていた様子がうかがえます。

【予告】企画展 横手盆地の三万年 第Ⅱ期 雄物川中・上流域の景観を復元する

会期：平成27年7月4日（土）～平成28年3月6日（日）